

校長通信

Morifun

ゴールデンウィークも明け、過ごしやすい季節になってきましたが、ここに来て新型コロナウイルスがじわりじわりと拡大してきています。現在、緊急事態宣言が拡大され、今日現在9都府県が対象となっています。岩手県内でも連日10名を超える感染者やクラスターの報告があり、油断できない状況にあります。5月10日に予定していた遠足も延期となり、がっかりした人も多いと思いますが、いずれ感染状況を確認しながら実施時期を決めたいと考えています。

このコロナ禍の中で、私は二つのことを学びました。一つは、情報選択の大切さです。この感染症に対して「正しく恐れる」ということが言われています。特に流行初期の様々な情報錯綜の中で、私は都合の悪い情報を無視あるいは過小評価する「正常性バイアス」に取りつかれました。インフルエンザよりも軽い、死亡率も低い、基礎疾患のある高齢者が罹患すると危険、という自分に都合の良い情報だけを信じていました。ところが、実際には感染力も強く、短期間で重症化するととても危険なウイルスであり、現在では変異株の脅威も伝えられています。情報の嵐の中で、正確で真に必要な情報の見極めが大事であることを実感しました。

もう一つは「自己責任」の本質です。感染拡大を防ぐために外出の自粛が求められていますが、それに協力し

ない人たちの言い分がこの「自己責任」という言葉でした。感染するのは自分自身なのだから自分で責任を取る、と言うのです。しかし、外出自粛は、自分の感染を防ぐだけでなく、人にも感染させないという「社会的責任」を求めるものです。人間は「個人的存在」だけでなく「社会的存在」であることを改めて認識させられました。

とにかく我慢の日々が続きますが、日々の日常を取り戻すことができるよう最善の行動を心がけましょう！

<5/11 高総体壮行式>

第73回岩手県高等学校総合体育大会がいよいよ開催されます。2年ぶりの舞台が戻ってきました。この日は生徒総会に先立ち、高総体に参加する部の壮行式が行われました。高総体の位置づけで行われる高校野球春季大会をはじめ、参加する各部の代表がステージに立ち抱負を述べました。応援団長からもみんなで声を出してのメールは送れないけど、日頃の練習の成果をいかに発揮してぜひ目標を達成してほしいという激励の言葉がありました。昨年悔しい思いをした先輩の分まで頑張ってください。Hang in there!

<5/11 生徒総会>

昨年度は放送で行った生徒総会も2年ぶりに例年通りの形で体育館にて行われました。執行部をはじめ各委員会、各部の代表がそれぞれの活動について報告し、生徒たちからの質問や意見に応えました。体育祭の日程や、校舎内でのスマホの使用、会計の執行状況など、それぞれが学校生活のことを真剣に考えている姿が伝わってくる討議も見られました。校長挨拶でも述べましたが、生徒諸君が主体となるのが生徒会活動です。自分たちでできることは、時には先生方からアドバイスをもらい積極的に進めてほしいと思います。そして、全校挙げて協力体制を築いてほしいと思います。今年度のスローガンである、『虹』～make you happy～のように、みんながハッピーになれる学園であってほしいですね。



<4/20 全校礼拝より>

新約聖書 コリントの信徒への手紙 10章 13節

高校生の時に読んで印象に残った言葉を紹介합니다。ノーベル文学賞を受賞した大江健三郎という小説家の、中学生以上に向けたエッセイ集『「自分の木」の下で』の中に、「ある時間待つてみる力」という言葉があります。若い人に言葉を贈るとしたらこれだけは伝えたいという思いからの言葉だそうです。

「ある時間待つてみる力」というのは、彼の本の中で数学の数式を例に挙げて、すごく難しい問題が出たときに、複雑な部分を()の中に入れておいて、別に計算を続けていく。()の中にとりあえず難しい問題を保留にしておいてそれ以外の部分を解いていく。このように今はもし解決できない問題があったなら、それを一旦()の中に入れて保留にする、そしてある時間待つてみる、そのことが大事なんだと言っています。特に若い人たちは、そのように()に入れて保留にしている間に、成長したり力を付けたりして、またその問題に向かったときに自然と解けるようになる。保留にしている間に人は成長したくましくなっていく。いま追い詰められていてどうしていいか分からなくなっているとき、思い詰めてしまうのではなくて、保留にしたっていい、しばらくそのままにして待つてみればいい。難しい問題はひとまず置いておいて、生きていく、生き延びていく、それを大事にしなくてはいけないというメッセージでした。高校3年生のときにこの言葉に出会い、その当時悩ん

でいたことがあり解決が難しかったとき、そうか一度保留にしていんだ、と考えるようにしました。その当時は解けなかった問題が、それから5年経ったとき、10年経ったとき、そして20年経って、自然にそういう問題が解けていく。そういう経験を私自身もしました。皆さんもいろいろ今悩んでいて解決が難しい問題があるときは、一度()に入れて保留にしてしばらく待ってみる。待ってみる力を奮い起こすことを心に留めておいてほしいです。

紹介したいもう一つは今日お読みした聖書の言葉です。「神は私たちに耐えられない試練を遣わせない。」この言葉はスポーツ選手が引用したり、昨年コロナで世界中が感染したときに引用されたりしました。この言葉の後には「逃れる道をも備えていてくださいます」と言っています。逃れる道というのは言い方を変えれば逃げ道、ということです。向かい合っていくのではなく、ずっと別の通りに抜けていくような新しい道がきっとあると伝えています。この言葉を書いたのはパウロという人で、彼にとってはイエス・キリストを信じる道、イエス・キリストが逃げ道の先に待っている、そういう感覚だったのかと思います。もちろんイエス・キリストを信じる信じないは皆さんの自由ですし、宗教というものも信じる信じないはそれぞれの自由ですが、今難しい問題に直面してもその問題から逃れる道を神様が備えていて下さるといのは、宗教を問わず私たちを励ましてくれる言葉であると考えます。

待ってみる力を奮い起こしてほしいということと、神様は必ず逃れる道も備えていてくれるという二つの言葉を心に留めてほしいと思います。(花巻教会牧師・鈴木道也先生)

今年度初の全校礼拝でしたが、1年生が耳鼻科検診のために、参加できませんでした。学校医さんの都合により、どうしても変更できませんでした。改めて通信を読んで、()に入れる「待ってみる力」に思いをはせてほしいと願います。

<市内一周継走、初優勝！>

4月18日に2年ぶりに行われた第74回盛岡市内一周継走において陸上部が初優勝を飾りました。ライバルの一関学院が棄権のため不在でしたが、2位に2分以上の大差をつけての優勝は見事でした。県レベルでは昨年の日報駅伝に続く県制覇となりました。個人でもキャプテンでアンカーを務めた大宮大虎君がトップ、若林夢希君が第3位の活躍を見せました。秋の駅伝シーズンが楽しみです。まずは個人でのインターハイ出場を目指し、切磋琢磨して頑張ってください。

高校の部 (5.9km×5) 優勝 1時間27分37秒
(若林夢希、佐藤美寿輝、佐々木稼全、井坂一希、大宮大虎)



<5/14部活動発表会>

令和3年度のPTA・教育後援会総会に先立ち、授業参観と並行する形で文化部による部活動発表会が体育館で行われました。音楽部、ダンス部、吹奏楽部、軽音楽部、さんさ部がそれぞれ日頃の練習の成果を披露してくれました。60名近くの保護者が参加する中、生徒達は一生懸命なパフォーマンスをしてくれました。来年度以降もこのイベントが継続できればと考えています。保護者の皆様からの感想をお待ちしています。

<今月お勧めの一冊>

皆さん、読書していますか。思えば昨年は4月29日から5月6日まで臨時休校となり、その間は映画館もクローズしており(私は筋金入りの映画ファン)、もちろんバレーボールをはじめとする大会(私は現在、岩手県バレーボール協会の会長です)もなく、とにかく読書に勤

しみました。8日間に7冊という記録的読書週間となりました。昨年ほどのペースには遠く及びませんが、現在でも月に7冊くらいのペースで読んでいます。因みに映画は今年になって30本鑑賞(もちろん映画館です)済み。では今月紹介する一冊は**風良ゆう『流浪の月』(東京創元社)**です。2020年本屋大賞受賞作なのですが、私は読み終えるまで知りませんでした。というのも、私の読書はほとんどが大学の図書館で借りてくるもので、図書館の本には帯もなければポップもありません。どういう基準で本を選んでいるかと問われれば、お気に入りの作家あるいは比較的名の知れた作家の本以外は、タイトルや表紙カバー、後はただ勘に頼るのみです。まあ比較的新しい本も手に取ることが多いです。まさに一期一会ですね。だから風良ゆうという作家もこの作品のこともまるで知りませんでした。本屋大賞のニュースも気にはする方ですが、昨年はコロナのニュースに埋もれていたのかもしれない。前置きが長くなりましたが、ざっくり言うと、小児性愛者の大学生が、9歳の少女を誘拐したとされる事件の当事者である2人の真実とその後を描いています。事実と真実は違う。本人たちにはわからないことを、周りはわかりやすい枠に当てはめて決めつける。デジタルタトゥーが、さらにそれに拍車をかける。ある感想のコメントです。作中に『トゥルー・ロマンス』という映画が何度も出てきます、残念ながらずっと気になりながら未見の一本です。何とかして見なければと思いました。ある意味この物語は、ひとりでは生きられない、けれど「共に生きて誰か」と寄り添って生きることがそう容易いことではないことを知っている人々の、哀しくも美しい、覚悟の物語なのである。(ライター 藤原奈緒) 表紙カバーのアイスクリームを眺めつつ(何故アイスクリームか…)、主人公たちのこれからの幸せを祈りながら本を閉じました。

